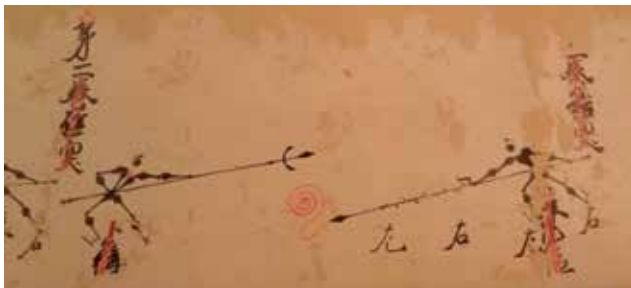


福岡県太宰府市の九州国立博物館で昨年末から2か月間開かれた「種子島特別展を見学しました。」宇宙に一番近い島のH2Aロケット模型に始まり、137万年前のゾウの化石、3万5千年前の旧石器時代にドングリなどの調理に使われた石器（南種子町・横峯遺跡）、日本最古の落とし穴（中種子町・立切遺跡）、縄文時代の石槍やヒスイの装身具などと続きます。

ロケットの真裏に回ると、種子島家に伝わる「国宗」銘の太刀が鈍い光を放っていました。解説文（望月規史・主任研究員）によると、国宗は鎌倉時代中期の備前直宗派を代表する刀工の一人で後鳥羽上皇のもとで作刀し、鎌倉幕府に請われて鎌倉に下り、相州鍛冶の礎を築いたといわれます。地元では鉄砲館の常設展示品ですが、刀剣専門家の間では国宝級とも言われる名刀にふさわしい保管法として、公開期間を限定するなどの工夫も必要かと、改めて価値を認識させられました。

第14代島主種子島時堯が受けた槍術の許状は槍さばきの姿勢や穂先の動き、関節や筋肉の動き、鬚の位置で顔の方向がわかりやすく描かれています。旧家臣の末裔としては、おそれ多い気もしますが、剣道で使う手ぬぐいのデザインにはもってこいと思います。

そういえば昨秋には馬毛島で3万5千年前の石器のほか、旧日本兵の遺骨や遺品の可能性のあるものが見つかっています。島の中央部出土の石器は、近ごろ国史跡に指定された横峯、立切両遺跡と同時代です。出土個所が滑走路予定地と重なっているため、県教委がこの2月に試掘などの予備調査を始めました。骨片や認識票のような金具が見つかったのは海岸線の砂地で、こちらもしっかり調査しなければなりません。



種子島時堯が受けた槍術の許状（部分）